



一史

新編



換序梅通翁遺書

蕉風自去々仇浩は今世に開く時わー一伝ふ
蕉翁吉地の魁より正風をそまきと貞享之録の世
より千五百余とて近代ありしなれは門人より仇浩の
道をよく承りて人稀之玉溜江戸より角峯を以て故
松尾尾張より高野越人治を以て酒堂京より去來大付より
正秀丈草彦根より許六加賀より小枝長徳より支那より
わーわー一近代の後より角峯雪の嘉傑わーわー一

似て六変化あるものとして、翁の風調をきく
一室の風体を開く我も花翁の自をふ及せられは
只一室の部を中色にその身も亦変化をこころけりて
其光の風は身もされは次中も愛の愛と重なる末ハ
節ありまのり成る洛もハ流るわと是ありきしや
此州ハ新流の翁に及せんとて新流もくし事と
おぼしき翁の流るわけりしやぬけ門より英勇力
おんしとたよりおまきりハ其翁も奔走しと自二三の
翁の心もけりしと是れが一室也翁記の心もけりし

門を京へくし中も翁もさしとて俗流の心とて且理也
翁の心ハ果世も交換して意門ハ唱われも世ハゆる
たんつしと美流風と心色別翁とぬる北枝ハさのり
昔も翁もさしとれも翁の風体とよく身もて血脈と
希因の翁も希因の心も聞更也これハ心風の流るわ
部ハ加るるしり洛もハ芭蕉堂と建ちし一蕉門とて再
真の心け時更もさしと白燈籠も太尾張も曉曇も朗洛も
希村もわしハ橋良も翁も一時も一都りて意つて後ん
その心も中真の祖もさしと心も一と心と未開けりし

四百目の長列ありて平素の六百餘のたしは乃
毛のしを越えし去娘ハ元連子小定親と
まゝに佛塔の門より實割に和文書門より
格別と免しし其物名の去娘と稱しし年の
概より娘を命じ是祖翁の心誠はまじき事
佛塔の故人の一月のまじりし事又今世
世より一家を立自らの家にて留る人々の
元連子とて養育しし娘のまじりし事
四百目の同じこと一柱の思ふまじりし事

佛塔のたしは平素の六百餘のたしは乃
毛のしを越えし去娘ハ元連子小定親と
まゝに佛塔の門より實割に和文書門より
格別と免しし其物名の去娘と稱しし年の
概より娘を命じ是祖翁の心誠はまじき事
佛塔の故人の一月のまじりし事又今世
世より一家を立自らの家にて留る人々の
元連子とて養育しし娘のまじりし事
四百目の同じこと一柱の思ふまじりし事



惟萬年

堤翁諱克昌號梅通京師人以俳諧鳴世榜其
 室曰麥慰舍
 二條藤公聞之賜花之下
 宗匠世人榮之元治紀元甲子三月十二日病歿年
 六十八社徒相謀建碑于洛東若王子山勒其得
 意句

慶應二年丙寅春二月 月洲岩垣龜識

男莖子建之
 補助門人中

二百五十七碑 竹書
若王子於醉 存書無句

脇起仙譜之連歌

梅通居士

花の歌まじや岩ありおわきれ水

法のあはれをそゆる 芳々

まじりてあはれ乃あはれ 掃ゆき

まじりてあはれ乃あはれ 掃ゆき

あはれのあはれすれをよきまけ

少くも結の脊をよきまけ

夕のあはれをよきまけ 月め

萱子

南徳

得也

楓城

霞吸

照骨

まじりてあはれ乃あはれ 掃ゆき

三巴

あはれ乃あはれ乃あはれ 掃ゆき

起風

行言りあはれ乃あはれ 掃ゆき

松花

長老ハきのこをよきまけ 掃ゆき

東樹

あはれ乃あはれ乃あはれ 掃ゆき

李青

あはれ乃あはれ乃あはれ 掃ゆき

夏谷

あはれ乃あはれ乃あはれ 掃ゆき

素竹

伝承あはれ乃あはれ乃あはれ 掃ゆき

梅香

縁を好まぬ 伝のまじりた

知風

ちかづつと川と結まゐる月おとす

耕雨

紅くくたけつとくたせいのる

寄青

魂柳をよけくきぬのくさせし

隆重

まうととめを路痛為くく

梅六

ま柳のさのきりふきんく

文海

皆田くまのきくくぬ日永さ

可白

ニテ
と味あつと肥くくはく年一の餅

茶遊

緋色の女房をくくぬくく

梅雄

ととまきりあこれのつとあけくぬか

蓼雨

まうめ今くくくあおる 歌

和水

同今に花月帝一の伝まぬり

拾山

いとと心柳乃皇まくく

霞田

我よりくまけくくくぬ温泉の利め

霞城

くあなふのくく心孫のほろく

柙枝女

くくは乃ぬか巻の縁手して這くせり

巴山

局のさくくくくあくく

瓢々

笑淋淫のくくく服もくくくつきて

月樵

切戸の外と巻にが後川

嵐翠

大なるまハ消く月あふ成きま

點池

角力なをくはあし程なうり

雅六

道飯のまきに毎夜もなれたるよ

桺強

今歩きりし山形時れう程

嵐之

別れ端くぬくまのあつてもり

史彦

石枕を虎やけしこたうく

千成

まじりてらこむしやれむまじり

一枝女

燈の妻のまじりし新なる人

北梅

あつてもぬをハ破るる袖今解

楓嶺

信の奴のともきよお於るよ

可春

あつてもぬをハ破るる袖今解

杏山

熱氣端くト治切しうり

響角

大車一うの秋の布子に鉄納戸

真好

懐かされた元信の判

佳明

ゆきゆき雪のけふも乃後多ゆ

有節

能市海くかける暖く産

一丸

壬午の佛知るやふ能る茶あつる

青瓜

十のあつるあつる

桺繁

三ツ

姉〜と湯女の肉〜め〜
地震〜一介は教の窮屈
古紙〜提り〜毒をあら〜
〜と別座を志〜
大名家の惣領息子阿房〜
大勢のち被お〜
各ふり〜ち〜
提〜御伴〜を駕〜
眼痛〜大ま〜珠教と首〜

祭魚
永暁
松鶴
南洋
一笑
梅嶺
虚真
霞笑
貴碩

小幸〜を粥の煮〜
度深ハ月待鳥〜
〜分〜や先ハる〜
隣〜^{三ウ}〜
今〜交の穴ハ〜
妹〜け〜
留〜
杉〜
醜〜

眠仙
笑山
暁翠
双魚
井蛙
赤甫
二團
綾丸
酒好

椽板うすきふり家のくまきくまき

花兄

あつのおとくぬ 挑灯

宗雅

中略

花のまはらうきくまきあつあつ

澄節

日の神とけいんをよぶ陽出

執筆

四月より五月の間に、
ありしとき、
なまのて、
考、
を、

考之部

門の、
今、
あ、
福、
ま、
お、
待、
さ、

イセ 耕雨
ハリニ 松色
カ 自澄
フシニ 霽湖
大ツ 采友
此山
祭奠
兔尺

想板ふ岸の根哉く余をこころい
きしけやまはらふる申の松のこ
敷入やぬしみの梅もうほしき
路人のましてあつやの岸のま
枯きまき年のはらふ本のまき
岸の梅あつらふのまき
長松の幹よりもまきこころあ
けふの梅もこころや月し梅
よもつたふ部こころゆるし柳し

林坡 カ

遊亀 フシ

挑岳 フシ

萬丈

松花 ニハ

孤柳 ニハ

帆船 イセ

凍園 カ

河夢

白鬼や傘の柄まりの雪しつ
臭かつる梅こころと船のこころ
りあつらふきの杖舞や梅のこ
月まきこころ梅おほほ心しれ
まきこころ梅もぬし梅のこ
ま風し煙路しり疎まつら
すこのの舟をのこころや浪水のこ
まきこころ梅もぬし梅のこ
まらつらつとまきこころ梅のこ

見外 エト

吟風 テハ

掲陰 イタミ

雲夕 アラミ

石叟 ナハ

公成

梧翠 イセ

巴大 イナ

華岳 ヨハリ

あつたふゆりはらゝはるゝ
店跡のうらゝ人ぬきを
ふゆりのやぶる障ふらゝはらゝ
葉のありゝ根のゆるし
月とらゝ葉をぬきぬらゝ
岸まゝらゝ舟ゝ冬地をらゝ
あつたふゆりゝき里ゝはらゝ
脊戸ゝ人ぬきぬき
長さゝぬらゝの向は

董子 得也 南德 姑山 兔山 楓城 夏谷 知風 松花

あつた川原ををらゝはらゝ
何ゆゝされゝぬらゝ
役者のあつたをらゝ
三月の入端ゝはらゝ
番ゝあつたをらゝ
志のゝはらゝのゆゝ
知つゝはらゝを
あつたをらゝはらゝ
あつたをらゝはらゝ

梅香 霞吸 子也 徳姑 兔城 耕雨

夏之部

雪^カ笑

終^キ節

美^キ中

奇^{エト}泉

莖^{ナニハ}子

素^{ナニハ}屋

契^{エナコ}史

超^カ翠^平

六月やむくらふ世のりきりお能
井戸堀のそとを涼しや夕ゆり
とくくゆるさやききき流のおと
程さくを橋へあつとまあらし
おんもくる九輪の志しとまあし
ま—あつ標のこまの清あう那
牛はあつ家陰小橋—まあしうれ
抱氣—しとあつとまきくむ旅も
ひ—らのさや程うく—この花

エツ
青古

ヲハリ
士前

カ
希云

キソ
仙翅

エト
等哉

タハ
楓城

イヨ
有秋

ヒヨ
星陵

ヒヨ
暁村

ちまのりて八道多りや瓜をさけ
瓜あつ—しとあつとまきくむ旅も
—のまあし—うれ
ま—あつ標のこまの清あう那
牛はあつ家陰小橋—まあしうれ
抱氣—しとあつとまきくむ旅も
ひ—らのさや程うく—この花

ヲハリ
黙池

イハミ
梅裡

エツ
碧水

エツ
舟曉

エト
野井

あはれなるもの
あはれなるもの
あはれなるもの
あはれなるもの
あはれなるもの

ささげの枝をささげ

南徳

神ふさほろしけり

楓城

掛的なるもの

董子

我子にほろしけり

徳

川原にささげの葉の月

城

ささげの枝をささげ

子

園にささげの枝をささげ

徳

ささげの枝をささげ

城

ささげの枝をささげ

子

はしらの方よも海はる松葉
そとせしつ電定於名し吹くしそみ
蒲葉もあてそよめ光 如馬
秋の中はまよ洞意とさしせおま
まらまのまよとそよの月
積りしつるまよとそよの秋のま
ゆらゆらとそよのまよとそよのま
白砂の積りまよとそよのま
まよとそよのまよとそよのま

子城徳子城徳子城徳

悪き節うらやみのよく利し
まよとそよのまよとそよのま
まよとそよのまよとそよのま
切けしつるまよ今まの能
浮舟のちまよとそよのま
聞のまよとそよのま
まよとそよのまよとそよのま
編み所のまよとそよのま
所よる内は白髪は希し

子城徳子城徳子城徳

望みしうらやみおく網のまきし
 朝日よ西風せり今も市のを
 二日十のさしめし
 夢よくささめし見よ
 葉あきしときく相り
 昔遠く積る塚の跡を
 只さみし地さか
 哀らかり欲求治さ乃
 故きしちこ

子徳城 子徳城 子徳城 子徳城

秋之部

空あつと秋さぬお田あう那
 初秋や戸の涼し海ひ
 満夕し道さくささ
 夕風たし竹もし初月お
 星今の影はつさか
 踊るらんあもさ
 幣串のまらさ
 濃夢のうさくさ

雨香 ヒシコ
 九起 スリ
 芦錐 エト
 貫乎 イコ
 之頁 カ
 北園 イナ
 野屋 ナハ
 牡鳴 ナハ

まゝぬり敷のまゝはまゝして蓋蘭のまゝ
ゆゑ又うまきをまゝする

むらさきや海をまゝまゝらうらうらうらうらうら

ゆきまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

一徳利新酒のまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

掛巻まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

薄く漬くまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

白のまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

おのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

得也 董子 楓城 南徳 徳也子

片断のまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

行けるまゝのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

清くまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

月まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

かゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

予そのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

城徳也子徳城子也城

順神の花の間へ 志すしきり記
 早しきまはらへ 昔はあはれこの
 結ましくも ちりまきり けり 鮭
 てしよませは 己く世おたのふ
 揚子のかきまへくそまき 海たしき
 法解のあはれ 温泉のたまはる
 せしきり 鐘のまきへ ちり けり
 まのあはれ ちり けり 白き
 冷きまをふき ちり けり 拾き

也城徳也子徳城子也

女房まき せりの けり ちり けり
 廊中 けり 拾き ちり けり
 川原く 拾き けり ちり けり
 ちり けり けり ちり けり
 日限き けり ちり けり
 ちり けり ちり けり
 傳中 けり ちり けり
 ちり けり ちり けり
 瀬より ちり けり

子也城徳也子徳城子

うしろのれはるきさくはづりやきさく月
梅よりふんあも海はちゆの月
門先ハ掙あもゆ——きさく月
きの路ききもとりおのきさくあうれ
松陰のおしりきさくあふ本のきさくあ
本のきさくあきさくあきさくあきさくあ
えんあきさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
水さくあきさくあきさくあきさくあ

エト 桃磯

ミノ 竹萬

イセ 閑美

アハシ 蔣池

アハ 久安

エト 一外

エト 鳥山

エツ中 霞糸

キツ 玄裳

きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ
きさくあきさくあきさくあきさくあ

ヨハリ 不退

イセ 禮鳥

イセ 梅笠

ヨハリ 一清

カクハ 欣尚

カタハ 杏青

ヨハリ 佳明

ヨハリ 羽洲

エツ中 兔山

今年丁酉年ハ所の終焉と

印〜くい〜も不〜と縁乃

りありと強〜れ麦懸金ふ

は〜〜〜倒の〜〜〜と

〜向〜〜〜

〜〜〜も〜〜〜〜り翁の目

〜〜〜花〜〜〜もゆか少吹

柳〜〜〜〜丸き〜〜は〜〜〜

提〜〜〜の〜〜〜帯〜〜〜の〜〜〜ちり

楓城

南徳

得也

萱子

宿川ふかきまきしるふ月おろし

松花

ま方のゆりうらにゆるりしり中人

けあしとまふ伏巻の垢あし

何もぬらまふ澄人もまらん

あきらしして異ききをきたる半の極

伊吹うらまき山缸のたしりさ

卯ころばあしきしりしりおあ

栗のころふまはまお陽暮

皷のよふ局はともあしり化務

城花也城花德子城花

傘のふあしりしりしりしり

湯下のころしりしりしりしり

まあしりしりしりしりしり

あまのころしりしりしりしり

程捨りしりしりしりしり

爪先しりしりしりしりしり

洗つて居のしりしりしり

野柳なまきしりしりしりしり

磨りしりしりしりしりしり

也城德也城花子也德

いしきりてはまのこころの拈擗

疥癩もあまのまののた

さあつてはまのたふす

新緑のまもまきさ 沖合

樟の楳のあかしをまのた

あまのまのたをまのた

あまのたをまのた

あまのたをまのた

あまのたをまのた

徳也城花子城也子徳

いしきりてはまのこころの拈擗

あまのたをまのた

あまのたをまのた

あまのたをまのた

あまのたをまのた

執筆 城也城花

昔の接道の所は石路のまゝに切かへ又母の跡
 へららたのまゝに直かへしつゝの石路のまゝに
 所の心へ泥路をいふとせむのまゝに
 漸く杜のまゝに登れ元の門へ通るゝ其業は
 ちつとたぬ意をぬき骨髄を握り東南にお湯
 名心揚地へ向しつゝ白吟ふゆ路を志すか
 連白の肝膽を碎き孤燈をともし残り
 昔の昔ののまゝに去來凡兆の人
 昔の昔ののまゝに去來凡兆の人

近世の愛せらるる名色先達教多かきしん
いしき他邦より移住せらるる洛の産穢あつて
風ふふあせりしおほしき風ふふあせりし
早もあつてしんもあつてしんもあつてしんも
まぢる舎の風調甲方おあつてしんもあつてしんも

銅陀殿よりしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
面目もあつてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
命教限りしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
道徳あつてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも

先陰をさしてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
築あさから追慕の連る法風を吟詠を梓
の舟をさしてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
まぢる舎を求めしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
しんもあつてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
道徳あつてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
あつてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも
まぢる舎を求めしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも

まぢる舎を求めしんもあつてしんもあつてしんもあつてしんも

海山堂
物志
泊心
又十

五

